

「小さな親切」運動静岡県本部賞

一歩ふみ出せた時

静岡市立長田東小学校 五年

室伏 好誠



「え？今のは車イス？」

昨年の十二月、藤枝で行われたイベントでの出来事です。駐車場に向かう坂を下っているぼくの横を、勢いよく、車イスに乗った人が通っていきました。

（きつと急いでいるのだろう。）

と、初めぼくは思っていましたでしたが、実は、坂の角度がきつくて、スピードがつき、止まれなくなってしまうたようでした。

（危ない！）

と思った時、車イスの人は、歩道と車道の間で止まりました。みんな、「あつ」とか、「どうしたんだ？大丈夫か？」などつぶやいているのに、だれも「大丈夫ですか？」と、車イスの人に声をかける人はいませんでした。あつという間の出来事で、だれも車イスが止まれなかったなんて、思わなかったのかもしれない。ぼくも、思いもしませんでした。しばらくしても、車イスの人は動き出す様子がありませんでした。

(もしかしたら、スピードがついてしまって、止まれなかったのかもしれない。いや、やっぱり急いでいたのかも？声をかけてみるだけでもしてみようかな。)

ぼくが止まって考えている時間は、ほんの少しだったはずだけど、ぼくの中では二〇分も三〇分も考えているように感じました。

勇気を出して歩き出すと、一人のおじさんが、車イスの人に声をかけていました。ぼくも急いでかけ寄ると、おどろくことに気づきました。それは、今年の夏に浜松城で会った車イスの人でした。車イスの車輪がじやりにはまり、ぼくのお父さんと、海外から来た男性二人が、力を合わせて助けているのに、ぼくはどうしたらいいのか考えるだけで、動けなくて後悔した気持ちを、その時思い出しました。

「ぼくも手伝います。」

そう声を出し、車イスを歩道にもどす手伝いをしました。車イスの人に話を聞くと、やっぱり、坂で車イスが止まらなくなってしまうそうです。助けてくれたこと、声をかけてくれたことがうれしかったと、お礼を言ってくださいました。気がつく時、そこはもう夕方。車イスの人は、今から愛知県に電車で帰ると言うので、うちの車で、近くの駅まで送ることにしました。駅に着くと、何度も、

「ありがとう。」

という言葉を言って、車イスの人は帰っていきました。

少しの気づかい。ぼくは、ほんの少しお手伝いをしたんだけど、気持ちがとても晴れ晴れしていました。この気持ちは、お礼を言ってもらったからじゃない。たぶんそれは、昨年何も出来なかった自分のカラを破ることが出来たからだと思えます。今、感じたことや経験したことを、これからも忘れないようにしていきたいです。



「小さな親切」運動静岡県本部賞

親切で人を笑顔に

静岡市立安東中学校 一年

九野 愛生



「ドシーン」

強烈な音が待合室に響き渡った。

「え？今の何の音？」

何が起きたのか、全くわからなかった。物音は病院のトイレからの様だった。確かさつきトイレには、幼い子供を連れた女の人が入っていたはず。そこからどうしてその様な爆音が聞こえてきたのか、私には想像できない状況だった。

その日私は、母と耳鼻科に来ていた。さほど混んでいない待

合室は、テレビの音だけが静かに流れているだけだった。順番をポーッと待っていた私達の耳に突然、何かがぶつかった様なものすごい音がしたのだ。直後に、

「ギャー。」

という子供の叫び声があった。私と母はとっさに顔を見合わせた。立て続けに、

「わーん!!痛いよう、やめて!!」

という泣き声と共に、

「いい加減にしろよ、もう!!早くしろ!!」

という怒鳴り声が聞こえてきた。泣き叫ぶ子供の声と共に母親がトイレから出てきた。私はその母親の顔を見て、恐怖で顔が引きつってしまった。子供はおでこを押さえていたが、その指のすき間から、赤く腫れていたのが見てとれた。

(何があったのだろうか。)

私は嫌な予感しかしていなかった。

診察を終え、薬局で再びその親子と会った。子供と離れて座っている母親の顔は、相変わらず険しかった。靴を脱いで遊んでいた子供に、靴を揃える様に母親が注意をしていた。さっきあれ程泣いていた子供が、無邪気な笑顔で靴を直した瞬間、私の母が待っていたとばかりにその子に声をかけた。

「ちゃんと直してお利口さんだね。いくつ?」

それを聞いた母親が、

「ありがとうございます。騒がしくてすみません。もう五歳なのに落ち着きがなくて……。」

と少しバツが悪そうに言った。すると母が、

「三人育てるのは大変ですよね。私も三人育てているから分かりますよ。でも、きちんとと言う事が聞けて良い子ですね。」

と続けた。見れば、その母親は胸に赤ちゃんを抱いていて、さっきの男の子のとなりには、その子のお姉ちゃんらしき子もいる。

母と話をしているうちに、その母親の表情がどんどん笑顔に変わっていくのが分かった。

帰り際、その母親は私の母に深々と頭を下げ、お礼を言っていた。もう子供を怒鳴っていた顔とは別人だった。私は母に、なぜ声を掛けたのか聞いてみた。母は、

「お母さんの気持ちがほぐれば、あの子に対する態度が少しは和らぐかなと思って。」

と言った。私は素直に感動した。優しさとはこういう事を言うのだろうかと思った。見て見ぬふりをする事も出来る状況の中で、あえて声を掛けた母の優しさを誇りに思えた。母の横顔がともまぶしかった。

